

ジュニア連盟の野崎広報委員長が新潟全中を勉強に行かれ、レポートを送ってくれました。中学校の指導者の皆さんはぜひ参考にさせていただきたいと思います。

全国大会を観て

北海道ジュニアバスケットボール連盟広報委員長
千歳市立富丘中学校 野崎 師靖

8月23日から行われた、第38回全国中学校バスケットボール大会。何度か全国大会を見たことはありましたが、今年は今までとは違った感慨がありました。いうまでもなく、私のチームが、あと一歩というところまで全国大会出場に迫ったからです。

毎年、同じような心構えでチーム作りをすすめているつもりでしたが、振り返ると、やはり今年は今までとは違っていました。都合のよい狙い方をしていたと反省しています。選手に恵まれ、狙える条件が揃っていたので、狙っていた、と、反省しています。また、「あと一歩」といってもそれはとても大きな差でした。完敗でした。正しくは「あと一つ勝てば全国大会に出場できるところまで行った」というものに過ぎませんでした。そして、全国大会を観て、その差を改めて感じました。

今回の全国大会では、全道優勝を遂げた北星学園女子中学を中心に、主に女子の試合を数多く観戦しました。これも上記の理由によることです。従いまして、本レポートでも主に女子の試合についての記述が多くなりますことをご承知おきいただきたいと思います。

さて、

毎年のことですが、やはり女子の上位進出チームには武器があります。チームとして徹底して鍛え上げている特徴があります。それはチームプレーである場合もありますし、個人の持ち味である場合もあります。

優勝した昭和学院のディフェンスは脅威でした。準優勝に輝いた、東京成徳はワンハンドのジャンプシュートに特徴があります。沖縄県代表のコザ中は、個々の高い運動能力に加え、ここの一番ではハイポストにボールを入れ、逆サイドのフォワードがバックカットでゴールに向かう、またはポストがそこから1:1を仕掛けるというオフェンスパターンに特徴がありました。愛媛県代表松山市立南第二中には180cmのセンターがいて、彼女を軸としたオフェンスに特徴がありました。

北星学園と予選リーグで対戦した福岡県の折尾中には力強いセンターがいて、ハイポスト近辺からのシュートや1:1はかなりの高確率で得点に結びつけることができていました。

このようなプレーは、ワンパターンといえるような単純なものではありません。分かっているように止められない。たとえそれを止めに行っても、そのプレーには必ず付随するいくつかのバリエーションがあって、結局はそれでやられてしまう、というものです。

そのような中、やはり私が一番印象に残っているのは優勝した昭和学院のディフェンス力でした。決勝戦の東京成徳は、一つのピリオドで10点前後しか得点で来ていませんでした。昭和学院は特別なディフェンスをしているわけではありませんでした。ハーフコートのオーソドックスなマンツーマンディフェンスです。東京成徳の4番には、確かに激戦を勝ち上がってきた疲労の色が見えました。しかし、そのような点を割り引いても昭和学院のディフェンスは強力でした。

東京成徳の選手は、まともにシュートをさせてもらえませんでした。冬に行われた北海道カップにおいて、東京成徳の試合は私も見ていました。皆さんの中にもご覧になった方がいることと思います。それだけに、あの決勝戦の様子はかなり衝撃的でした。

決勝戦までの東京成徳の戦いぶりの中で印象的だったのは、前述した通り、選手個々のワンハンドジャンプシュートです。速攻で攻め込み、最後はワンハンドのジャンプシュート。昨年末、遠香先生が南空知でクリニックをされていた内容が、まさに目の前で、しかも全国大会の舞台で実践型として繰り返されている、そのような印象です。その時のクリニックの内容は、DVDに収めたものを何度も見て、勉強させていただいていました。しかし、改めてそのとき、北海道に帰ったらもう一度見直し、自分の中で整理しながら早速チームで指導しよう、いや、しなければならない、と、心に決めたのをおぼえています。

その他、特に気がついた・気になった2つの点について記述させていただきます。

- ・ ガードの安定性

全国大会上位チームのガードは安定しています。ボール運びはもちろんです。ボール裁きも冷静です。ボールキープも力強いです。決して浮いたパスなどしませんし、逃げたようなステップもしません。当然、ディフェンスの強いあたりにも負けませんし、冷静なゲームコントロールは言うまでもありません。速さと強さと冷静さを兼ね備えた選手がガードにいるという点です。

- ・ 大型選手に対し

全国大会ともなれば、必ず170cmオーバーの選手がいると思ったほうが良いでしょう。今回ベスト4に入った愛媛県のチームには、180cmのセンターがいました。北海道にはなかなかそのような選手はいません。いたとしても数年に一度現れるかどうかです。強化委員の先生方もいつも「北海道にでかい選手はいない」と嘆いていらっしゃいます。そのような長身選手を相手にいかに勝利を掴み取るかという点も、私たちの課題であると思います。

以上、今年度の全国大会を観戦した私なりの感想を主とした形で、レポートを書かせていただきました。

今回、開会式から最終日まで新潟へ赴き、

いろいろな場所でいろいろな方といろいろなお話をさせていただきました。

それらの中で、

U-15女子のヘッドコーチをされている鷲野先生が次のようにおっしゃっていました。

「今年も一年間、日本全国いろいろな所に行かせてもらいました。
でも、北海道カップのときのあの先生方は異常です！
あんな県はありません！北海道は熱いですね！」

北海道カップで、北海道の指導者が大勢、
本州のチームのベンチの後ろに群がるようにしながら試合を観戦していた、
あの光景を指してのお話でした。

もちろん、私もその群衆の1人でしたが、あの姿が異常だという認識はありませんでした。

でも、それが「熱い」というならば、まだまだ“熱く”がんばっていこうと思います。

“次こそは”という決意を胸に、がんばっていこうと思います。

夢は見るものではなく、叶えるものだと信じて、頑張っていこうと思います。

H B A（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会